

歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第五巻「文化財編」は平成一九年二月に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思えます。

前回までは、第一巻のうち「自然編」の内容を紹介してきました。今回からは、「古代編」を各章ごとに取り上げていきます。「古代編」では、全体を四章に分け、旧石器時代から平安時代までを扱っています。

まずは、第一章「日野町の黎明」を手がかりに、日本列島で人間の生活の営みが始まった旧石器時代から、古墳時代までの日野の地域像を考古学の成果をもとに見てみましょう。

遺跡が語る

日野の縄文・弥生時代

日野町で人間の活動を示す最古の痕跡が見られるのは、縄文時代です。この時代の遺物（石器や土器）で、最も古いものは縄文時代草創期（約一万三〇〇〇年前）の石器三点で、狩猟に使われた槍の先端部分に当たるものです。これらは、日野谷の薬王寺溜（西大路・



▲内池遺跡出土の磨製石斧

一方土器は、弥生時代の集落跡である東裏（西大路）・森西城（木津）・内池（内池）の各遺跡で出土しています。方形周溝墓と呼ばれる当時の人々の墓も何箇所か

北代（上野田）・風呂流（寺尻）の各遺跡で一点ずつ見つかります。約二五〇〇〜二四〇〇年前に始まるとされる弥生時代になると、水田稲作が大陸から伝わりました。近江でも、弥生時代中期初頭（約二一〇〇年前）とされる、大中の湖南遺跡（安土町）で県内最古の水田跡が発見されています。水田稲作に伴い、木製の鋤や鍬が使われるようになり、日野でもこうした農具を作製するための石器（石斧）などが出土しています。

紀元前二世紀以降からの弥生中期になると、大規模な集落の形成、戦争による諸集落間の統合を経て、日本列島の各地にいくつもの国家が形成されます。こうした集団の指導者は、自らの権威や権力を誇示するため、大型の墳墓を築くようになり、なかでも畿内を中心に大きな勢力として成長したのが、大和政権です。近江では、四世紀中頃から前方後円墳が広く築造されるようになります。このことは、この地域が大和政権の支配下に入ったことを象徴しています。

日野の古墳時代

で発見されており、内池遺跡では五基の墓が見ついています。一辺が一〇〜二〇メートルの四角い溝で区切られ、低く盛り土をした当時の墓は、一箇所からある程度まとまって発見されることが多く、その配置から血縁などに基づく一定の秩序が認められます。



▲日枝社古墳出土の円筒埴輪破片

この場所には現在、日枝神社（南山王社）があり、前方後円墳があると気づきにくいのですが、丘陵の北斜面からは円筒埴輪の破片が採集されており、日野川上流域も大和政権の支配下にあったことが分かります。

湖東地域に分布する古墳を築造した勢力は、日野川水系や琵琶湖水運を通じて相互に強く結びついてきたと考えられます。この地域は、近江から伊賀・伊勢などへつながる交通の要衝に位置し、大和政権が東海地方に影響力を及ぼす上で、重要な拠点だったので。

湖東地方では、雪野山古墳（東近江市）・瓢箪山古墳（安土町）などの大きな前方後円墳が、四世紀中頃から末頃にかけて築造されました。日野町内でも、同じ時期に日枝社古墳（大窪）が築造されています。このことは、日野川上流の地域に当時有力な権力者が存在したことを示しています。